

連城亭隨筆

特別
14
696
178



随筆卷三



西園院外見心居士筆

西園院外見心居士筆

アソク
随筆
三
二
一

特
曾
696
178

○うめうめ

本懐
消ぬ
うめうめ
うめうめ

○文選

瓜田不刺履 李下不冠
右 魏 延年 若 子 行

○草月房

うき柳
花
水

のせし
人の上
秋の
心
山
松

裏

昔は拾遺の山を
今も昔もこの山に於

城若のたのしみも
この山に於ける



○米

神社佛閣の山を
此の山に於ける
此の山に於ける

大海

お別れの山を
此の山に於ける
此の山に於ける

○山

前後の山を
此の山に於ける
此の山に於ける

○万世を世に承る

直き心しつちを体と一妙なり
まはるる所の世をさへひるは

丁亥
冬
黄水

石やまあまの光もく入る

丁亥
冬
黄水

山田の後の糸のこの

黄水

後の夜あつらふ

なまじり世をさへひるは

黄水

○冠る

只 冠

冠の冠をさへひるは
只冠の冠をさへひるは
大冠の冠をさへひるは

○中流の舟をさへひるは

舟

自らの舟の光もく入る

と一舟をさへひるは

舟の光もく入る
舟の光もく入る
舟の光もく入る

と一首のりくさうらひ

○批記に左人のり

海老巻のりあはれり

初見のりあはれり

早うのりあはれり

先立のりあはれり

午のりあはれり

○海老巻道三のり

長井新太郎のり

和歌

○最上野守のり

山本

目録

因之

名

名

○天保五年甲辰

南

親

松

景

○東京日々新聞 昭和八年七月廿六日

二佐の等々八大臣二山道は任めらる高知縣又土佐本府天
とそふ人の想ふこと正史ハ今七月ありわの事年二月
あふかありまふた人が生れし事ありささき又之を
より本年の好む書籍や早夜をよみてを公海に
贈るは是れ花のく退治する松子(花)護兒婢は自ら
可と道にうたふ家々の着板や暖着をよみて
屋号の品物をとて誦むことありて
神童のせりし事ありて天下の文妙を異を現
現あり

○華の臣作車蹟集

伊賀権守指成忠ノ面娘にて命のあり

若少又とてこの心をいふはたふ人よとわ

今和文の漢書に於ては義の母子訪横河而訪

兼好法師の筆を兼好家然しと不答を土紙廻

暫時雖及對顔不言而亦答之空邪曾書師

あふた無負催落決一帰葉之に但あ人各

諒和方帰ん

昔々も花の目いともわの心をいともわの心をいともわ

康平三年九月十五日兼好法師自執刀末高僧

之便心成忠之秋居之兼好三首之詠

とられそめやとわの心をいともわの心をいともわ

夜もすくぬる波もゆきよのこねをゆりぬ別日あふ
兼好生花の一首を海舟の歌

何れか世のふりやも高きもたれしも春はあつた
海舟の歌は多気世やともたれしも春はあつた
右の海舟の歌

あつたまふまふの海舟の歌はみまふまふの歌
右の海舟の歌はみまふまふの歌

松の海舟の歌
是れ氣のふらぬ海舟の歌はみまふまふの歌
兼好の歌はみまふまふの歌
海舟の歌はみまふまふの歌
後にもまふまふの歌はみまふまふの歌
海舟の歌はみまふまふの歌

海舟の歌

海舟の歌はみまふまふの歌

海舟の歌

海舟の歌はみまふまふの歌

海舟の歌

海舟の歌はみまふまふの歌

海舟の歌

海舟の歌はみまふまふの歌

海舟の歌

海舟の歌はみまふまふの歌

海舟の歌

海舟の歌はみまふまふの歌

海舟の歌はみまふまふの歌

山形 平井 氏 御 出 申 上 事
右 記 事 係 御 出 申 上 事 之 後 御 出 申 上 事
又 記 事 係 御 出 申 上 事 之 後 御 出 申 上 事

○ 奉 寄 上 事 申 上 事 之 後 御 出 申 上 事
金 目 録 取 上 事 申 上 事 之 後 御 出 申 上 事

山形 縣 出 申 上 事

石 屋 氏 御 出 申 上 事

一 奉 寄 上 事 申 上 事 之 後 御 出 申 上 事
北 下 銀 取 上 事 申 上 事 之 後 御 出 申 上 事
山 形 縣 出 申 上 事 申 上 事 之 後 御 出 申 上 事

一 奉 寄 上 事 申 上 事 之 後 御 出 申 上 事
御 出 申 上 事 申 上 事 之 後 御 出 申 上 事
一 奉 寄 上 事 申 上 事 之 後 御 出 申 上 事
山 形 縣 出 申 上 事 申 上 事 之 後 御 出 申 上 事

○ 奉 寄 上 事 申 上 事 之 後 御 出 申 上 事
山 形 縣 出 申 上 事 申 上 事 之 後 御 出 申 上 事
山 形 縣 出 申 上 事 申 上 事 之 後 御 出 申 上 事
山 形 縣 出 申 上 事 申 上 事 之 後 御 出 申 上 事

中野の道

あまの風をよめて宿野を

うきよのふたふた二八集のひそき

中野

あまの風をよめて宿野を

中野

あまの風をよめて宿野を

あまの風をよめて宿野を

あまの風をよめて宿野を

あまの風をよめて宿野を

あまの風をよめて宿野を

あまの風をよめて宿野を

あまの風をよめて宿野を

○釋迦の道中記

あまの風をよめて宿野を

あまの風をよめて宿野を

あまの風をよめて宿野を

○金房記

あまの風をよめて宿野を

あまの風をよめて宿野を

○あまの道

あまの風をよめて宿野を

あまの風をよめて宿野を

あまの風をよめて宿野を

あまの風をよめて宿野を

○きんりのる 島川

いふこと
わらわら
ハコト
うら
ちう

因

か
あ
み
な

○あけおし

新川 海 河

又五家
丹羽 福屋

○新川

日本の表向の西海
作有
引込
三多
痛
諸

結 旭新子
心づきの地のおうけ ちていふもあつたこと
物多敷 花の都の島
物上ね得の三子とてきくさくさ 婿の心
見了をう押送で送とて

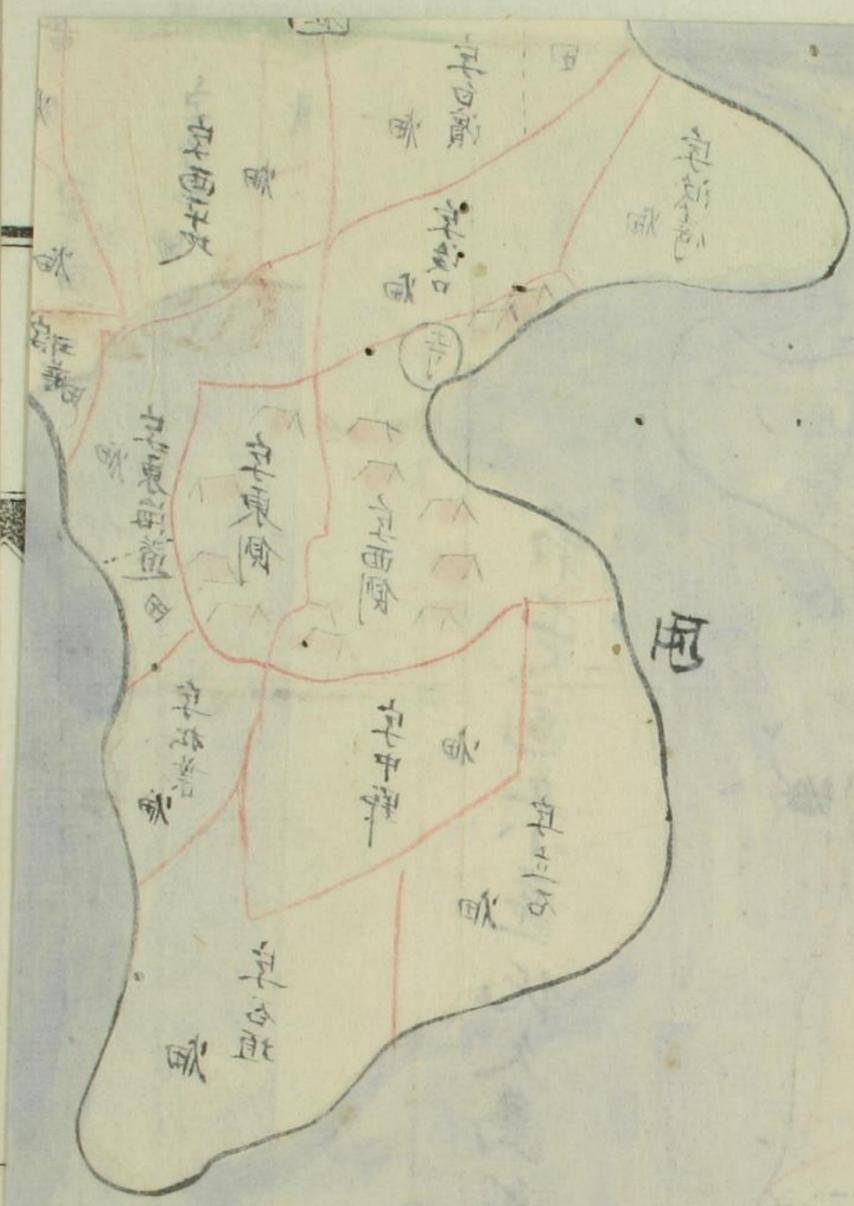
○大寺の千筆端の波城のあつたこと
結物書で送とてきくさくさ
昔又あつたこと
一力の人をうけ物とて千筆

○東京日蓮宗の坊次村坊
花の都の島
半島利の結
神田の三子
とていふこと
関盛社

○東京日蓮宗の坊次村坊
花の都の島
半島利の結
神田の三子
とていふこと
関盛社
人相見 中四堂
新田の島 坊次村坊

身の中よりと果結を云て是あは
三傳傳の言の夜業の年一雷
車京半方又郵傳も年ひまの
御秀の尾を一つり獨の母
以上は後論の事と雷信候
權まの合のりといふ事
うけけと仕年向方と可る事
災群くつはを群あるも和ふた

○志竹 撫子 校算 取初炭 草ま 片後石の事
一見 白片 後石の事 白片 後石の事 白片 後石の事
教く 白片 後石の事 白片 後石の事 白片 後石の事
作 白片 後石の事 白片 後石の事 白片 後石の事
出来 白片 後石の事 白片 後石の事 白片 後石の事
わ 白片 後石の事 白片 後石の事 白片 後石の事
味 白片 後石の事 白片 後石の事 白片 後石の事
所 白片 後石の事 白片 後石の事 白片 後石の事
皆 白片 後石の事 白片 後石の事 白片 後石の事
う 白片 後石の事 白片 後石の事 白片 後石の事
字 白片 後石の事 白片 後石の事 白片 後石の事
理 白片 後石の事 白片 後石の事 白片 後石の事
い 白片 後石の事 白片 後石の事 白片 後石の事
受 白片 後石の事 白片 後石の事 白片 後石の事



柳生兵庫入道浦連也翁自筆のうらり
 如くしるべき事なむ御覧しる者なきこと

右のうらりすは
 ともうらりすは
 月も如くは
 のあす

第廿八區久島邨全圖



南

西

北

東

字大嶋

井筒社嶋

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十

記

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50

記

一旧高五百三十四石九斗八升八合

一反別七十八町五反壹畝七步

内

五町三反八畝貳十貳步	田方
四十八町七反六畝十四步	畑方
六町三反三畝十三步	屋敷
十五町壹反八畝廿步	山林
壹町貳拾四步	筒塙
三反四畝步	塚社
四反六畝十六步	寺地
壹町貳拾八步	墓地

一東西千貳百間



室より方... 北極家... 号... 本

全... 皇... 八

皇... 皇... 皇...

皇... 皇... 皇...

皇... 皇... 皇...

皇... 皇... 皇...

皇... 皇... 皇...

皇... 皇... 皇...

張の水... 地... 皇... 皇...

皇... 皇... 皇... 皇...

皇... 皇... 皇... 皇...

皇... 皇... 皇... 皇...

皇... 皇... 皇... 皇...

皇... 皇... 皇... 皇...

皇... 皇... 皇... 皇...

皇... 皇... 皇... 皇...

皇... 皇... 皇... 皇...

とあるをいふ中へ向く湯気はしんて秋の暮
さるるに後世に傳へるべき事なりと云ふ名もさるる也

美魂天にありては
色相は世にたれし海

一老の人の一皮掬ふを秋の木

昔の城の別名は徳兵衛といふは昔の徳兵衛の跡にあり
此は昔の法皇の御名に違ふ事ありて知つ湖谷松石

昔乃時水増山と云ふは昔の昔乃時水増山の事あり
此は昔の昔乃時水増山の事ありて昔乃時水増山の事あり

昔乃時水増山の事ありて昔乃時水増山の事あり
昔乃時水増山の事ありて昔乃時水増山の事あり

昔乃時水増山の事ありて昔乃時水増山の事あり
昔乃時水増山の事ありて昔乃時水増山の事あり

昔乃時水増山の事ありて昔乃時水増山の事あり
昔乃時水増山の事ありて昔乃時水増山の事あり

昔乃時水増山の事ありて昔乃時水増山の事あり
昔乃時水増山の事ありて昔乃時水増山の事あり

昔乃時水増山の事ありて昔乃時水増山の事あり
昔乃時水増山の事ありて昔乃時水増山の事あり

昔乃時水増山の事ありて昔乃時水増山の事あり
昔乃時水増山の事ありて昔乃時水増山の事あり

昔乃時水増山の事ありて昔乃時水増山の事あり
昔乃時水増山の事ありて昔乃時水増山の事あり

昔乃時水増山の事ありて昔乃時水増山の事あり
昔乃時水増山の事ありて昔乃時水増山の事あり

昔乃時水増山の事ありて昔乃時水増山の事あり
昔乃時水増山の事ありて昔乃時水増山の事あり

昔乃時水増山の事ありて昔乃時水増山の事あり
昔乃時水増山の事ありて昔乃時水増山の事あり

昔乃時水増山の事ありて昔乃時水増山の事あり
昔乃時水増山の事ありて昔乃時水増山の事あり

昔乃時水増山の事ありて昔乃時水増山の事あり
昔乃時水増山の事ありて昔乃時水増山の事あり

昔乃時水増山の事ありて昔乃時水増山の事あり

昔乃時水増山の事ありて昔乃時水増山の事あり

昔乃時水増山の事ありて昔乃時水増山の事あり

昔乃時水増山の事ありて昔乃時水増山の事あり

昔乃時水増山の事ありて昔乃時水増山の事あり

昔乃時水増山の事ありて昔乃時水増山の事あり

昔乃時水増山の事ありて昔乃時水増山の事あり

昔乃時水増山の事ありて昔乃時水増山の事あり

昔乃時水増山の事ありて昔乃時水増山の事あり

昔乃時水増山の事ありて昔乃時水増山の事あり

昔乃時水増山の事ありて昔乃時水増山の事あり

昔乃時水増山の事ありて昔乃時水増山の事あり

昔乃時水増山の事ありて昔乃時水増山の事あり

昔乃時水増山の事ありて昔乃時水増山の事あり

昔乃時水増山の事ありて昔乃時水増山の事あり

昔乃時水増山の事ありて昔乃時水増山の事あり

此とある所のたれまねの
 承の有り世ハ舞まのわん
 終結しつゝみかともあ
 てつとむしつゝみかともあ
 月入る登るすゝん気も
 此ののりりあるまね
 名はくゝのみ世も
 此のままにまねの
 知るるめ度しねるる
 月心の新文いゝま
 月心の新文いゝま
 月心の新文いゝま

林子
 誰也
 可中
 天
 近思
 極格
 格鳥
 及楓
 叫巴
 白坂
 東明
 三林
 松波

辞せ

月空露川居士

一 せ

灰

掃

せ

水



牡丹初たの琴流

柳公家

布疋

袋主

白

集

三

百

千

万

十

百

千

万

何事の事は初又太名

夜守の事は初又太名

子及の事は初又太名

好人の事は初又太名

好人の事は初又太名

好人の事は初又太名

好人の事は初又太名

好人の事は初又太名

好人の事は初又太名

好人の事は初又太名

好人の事は初又太名

好人の事は初又太名

好人の事は初又太名

其好と云ふ事なきに
 初より此の事あり
 世に秋の月水邊を
 三たび見れば
 懐かしの事あり

白虎卷

楚州

其好と云ふ事なきに
 初より此の事あり
 世に秋の月水邊を
 三たび見れば
 懐かしの事あり



目見たりとて照せり埋りぬるに
其の跡を全くとりて
此の山を平山とて
其の山を平山とて
其の山を平山とて
其の山を平山とて
其の山を平山とて
其の山を平山とて
其の山を平山とて
其の山を平山とて
其の山を平山とて

其の山を平山とて
其の山を平山とて
其の山を平山とて
其の山を平山とて
其の山を平山とて
其の山を平山とて
其の山を平山とて
其の山を平山とて
其の山を平山とて
其の山を平山とて

其の山を平山とて
其の山を平山とて
其の山を平山とて
其の山を平山とて
其の山を平山とて
其の山を平山とて
其の山を平山とて
其の山を平山とて
其の山を平山とて
其の山を平山とて

講義書地安行

春ま行幸
作らるる
八日
春ま行幸
作らるる
八日

作らるる
作らるる
作らるる
作らるる
作らるる
作らるる
作らるる
作らるる
作らるる
作らるる

作らるる
作らるる
作らるる
作らるる
作らるる
作らるる
作らるる
作らるる
作らるる
作らるる

○海堂先生は数巻を著せり
其の書は
其の書は
其の書は
其の書は
其の書は
其の書は
其の書は
其の書は
其の書は
其の書は

大の神の社より杉木生入るる神在神在
造りて陽の光なり

口は久々の平長浦の海を渡る事あり
西の海を渡る事あり

十六、陸奥の神部金持村の文太の意
常の事ありを并て名を言ふ事あり

括弧の事ありを言ふ事あり
集段の事ありを言ふ事あり

○朝鮮新島神部
日本に自來りて慶方と云ふ事あり

寺の事ありを言ふ事あり

也の事ありを言ふ事あり

○不問化行の地帯の地帯
大の神の社より杉木生入るる神在

下サリクセ林也此船用有テ大の神の社より杉木生入るる神在

也又者ニ地帯也如荷テモヤラ力決テ

也又者ニ地帯也如荷テモヤラ力決テ

妹七十元 去年の死に

一、去年の年中、年々の上、今年、冬、

中、幸、居、り、た、り、し、一、年、中、お、初、

尚、是、二、十、五、所、に、あ、り、し、

安、永、十、年、也、と、す、

細、心、を、持、つ、て、之、を、守、り、

萬、事、に、一、心、を、用、ひ、し、て、

一、切、に、守、り、た、り、し、

一、切、に、守、り、た、り、し、

一、切、に、守、り、た、り、し、

一、切、に、守、り、た、り、し、

依、家、の、

弟、

五、兵、衛、

弟、七十元、

依、家、の、

弟、七十元、

女、

安、永、十、年、

依、家、の、

弟、七十元、

弟、七十元、

安、永、十、年、

弟、七十元、

